慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評 : Junko Kitanaka, Depression in Japan: Psychiatric Cures for a Society in Distress, Princeton University Press, 2012
Sub Title	
Author	佐藤, 雅浩(Sato, Masahiro)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2014
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.19 (2014. 7) ,p.102- 104
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評 目次のタイトル : 「書評 : Junko Kitanaka Depression in Japan」
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20140705-0102

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：Junko Kitanaka

Depression in Japan: Psychiatric Cures for a Society in Distress
Princeton University Press, 2012

佐藤　雅浩

本書は、長年にわたり鬱と自殺に関する医療人類学的研究を続けてきた著者による、はじめての単著である。本書の学術的、現代的な意義を紹介するまえに、鬱と自殺に関する現代日本の状況について、簡単に確認しておきたい。

周知のように、失業率の増加や企業倒産といった長期不況の影響が人々に気づかれるようになった 1990 年代の後半から、日本では、国内の自殺者数の増加が問題視されるようになった。政府統計によれば、日本における自殺者数は 1998 年にはじめて 3 万人を超え、その後、10 年以上にわたって高止まりを続けている [1)]。こうした自殺者数の増加が社会的関心を集めるようになったのと同じころから、日本では、自殺の原因を犠牲者の精神的な病（精神疾患）から説明しようとする報道や著作が目につくようになった。このような精神医学的な言説において、おそらく最もよく使われたタームが「うつ」あるいは「うつ病」であり、この病気が、日本における自殺率の高まりを説明する主要な原因であるかのような語りが多く見られた。また、こうした医師や心理学者による説明が社会に広まるなかで、1990 年代後半から 2000 年代前半の日本では、「うつ」という言葉が、自殺者の精神的な病理を語る文脈をこえて、発話者の日常的な精神不調をあらわす言葉として社会に定着していった。2000 年代以降の日本では、「うつ」という言葉が、現代に生きる人々の目に見えない疲労や苦悩、あるいは「失われた 10 年」以降の陰鬱な日本社会の雰囲気を表現する“流行語”となったと言っても過言ではないだろう。

しかし、ここ数年の「うつ」をめぐる日本の言説状況は、この病の診断を受ける（あるいは自己診断によって「うつ」を自称する）人々の増加に伴い、ある種の混乱に陥っているようにも見受けられる。なぜなら、「うつ病」の増加を国民生活における重大な健康リスクであると認定し、さまざまな対策を行うべきであるという研究者や行政機関の見解がある一方で、日本における急速な「うつ」の広まりは、実態として「うつ病」を患う人々が増加したというよりも、製薬企業による抗うつ薬のマーケティング戦略、あるいは公的機関による啓発活動の影響によって、実態以上にこの病が増加している印象を人々に与え（場合によっては医師による過剰診断を招いた結果として）生じているのではないか、という問題提起がなされるようになったからである [2)]。果たして、日本ではこの十数年のあいだに、「うつ」に罹患する人々が「本当に」増加したのだろうか。それとも人々は、「うつ」に関する不正確な情報に翻弄されているだけなのだろうか？

こうした「うつ」をめぐる現代の不確定で混沌とした状況を考えるにあたって、北中氏の近

佐藤雅浩「書評：Junko Kitanaka *Depression in Japan*」
『三田社会学』第 19 号（2014 年 7 月）102-104 頁

著：*Depression in Japan: Psychiatric Cures for a Society in Distress* は、非常に示唆に富む著作であり、日本における医療＝社会的な「うつ」の流行（epidemic）を読み解くための、画期的な視点を提供してくれる。この著作で北中氏は、現代日本における「うつ」の流行という奇妙な現象の背景にあるものを、歴史的・臨床的・社会的な観点から、注意深く明らかにしている。まず著者は「歴史の中のうつ」（Depression in History）と題された本書の第 1 部で、近世以前の文献に遡り、日本語における「うつ（鬱）」概念の連続性と非連続性について論じている。そこでは、かつて「気」の塞ぎや停滞の病として概念化されていた「鬱症／鬱証」という病が、近代化に伴う西洋医学の流入と定着のなかで、患者の遺伝的・内因性の脳神経系疾患としての「鬱病」という西洋医学的な概念へと転換していったことが指摘されている。これは日本語としての「鬱」概念が、近世以前から言葉としての連続性を保ちながらも、近代以降は、その意味内容を大きく転換させたことを示す重要な指摘だといえよう。なぜなら著者自身が強調しているように、これまで日本の精神科医たちは、「うつ」という言葉が、明治以降の近代化とともに新しく導入された西洋医学的な概念であると考えてきたからであり、それ以前から継続してきた日本語としての「鬱」概念の歴史を明らかにした点が、本書の大きな貢献の一つであると考えられる。

このように、本書は前半部で「うつ」に関する歴史的背景について多くの重要な指摘を行っている。しかしそれと同時に、異なる文化圏におけるこの病に対する多様な認識の体系、あるいは臨床的な治療の実態についても、多くの示唆を与えてくれる。Depression in Clinical Practice と題された本書の第 2 部では、筆者が長期にわたり精神医療の現場で行ったフィールドワークから得られたさまざまな知見が紹介されているが、そこではたとえば、日本の精神科医たちが、患者の心理学的な問題についてあまり深い考察を行わずに、むしろ患者の身体的な不調や変化に関心を寄せる姿が描かれている。筆者によれば、これは精神科医たちが、しばしば批判の対象となるような生物学的な還元主義（biologism）に陥っているからではなく、「心を癒す過程において、身体が中心的な媒体（medium）となる」という文化的な信念（身体主義＝somatism）から影響を受けているからだという。こうした筆者の洞察は、異なる文化的な背景、あるいは病に対するローカルな認識の体系が、精神疾患の経験や理解に対しても影響を与えていることを示す、重要な指摘だといえよう。また本書はこのほかにも、第 3 部（Depression in Society）で近年の過労と自殺に関する裁判の経過（電通事件等）と日本社会における「うつ」の増加を関連づけて分析するなど、さまざまな興味深い指摘を行っている。

しかし紙幅の都合上、ここでは冒頭で述べた今日的な状況（うつの流行）に対する、本書の貢献について検討してみたい。すなわち、なぜこれほどまでに多くの日本人が、1990 年代以降に、自他の苦痛や疲労、あるいは心身の不調を「うつ」という概念によって表現しはじめたのか？この問題に対して筆者は、過去 30 年以上にわたって、日本の自殺やうつに対する文化的な理解を変容させてきた医学的・社会的・法的な討議の過程を、判例やマスメディア報道、過労自殺に対する行政対応などから、丁寧に解き明かしている。そして結論部付近で筆者は、日本

の精神科医たちが、草の根的な過労死問題の運動とも連携しながら、「うつ」という概念の政治化を通じて「ネオリベラルな経済秩序下において、ますます強まる抑圧的な労働現場の文化に抵抗し、人々の苦痛に社会的な正統性を与える手段を提供」することができたからこそ、これほど多くの日本人に、この概念をなじみ深いものとすることに成功した、という解釈を提示している（p.193）。評者もこの解釈には賛同するところが多い。確かに、1990 年代以降の日本における急速な「うつ」の広まり（ここには、医学的な診断をうけた「うつ病」患者の増加とともに、「うつ」という言葉が、日常的な心身の不調をあらわす人々の共通言語となったという意味も含まれる）には、その前後の時代に生じた労働環境の変化や過労自殺の社会問題化といった要因が大きく影響していると考えるのが妥当であろう。

しかし、「うつ」の流行というこの現代の現象を、より長い歴史的な視点から捉え返してみるならば、本書には、未だ検討しつくされていない問題も残されているように思われる。それは、過去の時代におきた歴史的な精神疾患の流行現象と、現代の日本で生起している「うつ」の流行には、どのような異同があるのか、という問題である。著者自身が本書のなかで触れているように、近代日本の人々は、これまでも心身の苦痛を表現するために、「神経衰弱」や「ノイローゼ」、あるいは「ヒステリー」といった精神医学的・神経学的なタームをしばしば用いてきた。少なくとも 19 世紀末以降の日本人にとって、自他の精神状態を日常的に観察し、そのありようを大衆化された精神医学のタームで語るという振る舞いは、身近なものであったといえる [3)]。しかし本書においては、こうした歴史的な出来事と、現代の新しい「うつ」の流行との関連が、十分には解明されていないように思われる。もちろんこうした評者の疑問は、本書の中心的な課題ではなく、無い物ねだりであることは承知している。しかし現代に生じている「うつ」の流行の、より精密な意味での現代性を知るためには、近代日本において生じてきた類似の出来事との異同、あるいは連続／非連続性を精査する作業が、今後求められていくのではないだろうか。

本書と類似したテーマを歴史の側面から研究してきた評者からすると、上述のような若干の歯がゆさは残るものの、本書は、現代日本における「うつ」大流行の歴史的・文化的・社会的な背景を知るうえで、おそらくもっともよく調査された、間違いなく画期的な著作である。本書は、現代日本における精神医療の文化的な背景、あるいは精神疾患と社会の関係性に関心を寄せる、すべての研究者にとって必読の書となるであろう。

1) ただし、2012 年には自殺者数が 15 年ぶりに 3 万人を下回り、自殺率低下の兆しが見え始めた。政府は自殺対策の成果が現れはじめたためとしているが、デュルケム的に言えば、2011 年の東日本大震災が社会に与えた影響も無視することはできないだろう。

2) 冨高辰一郎. 2009. 『なぜうつ病の人が増えたのか』幻冬舎ルネッサンス.

3) 佐藤雅浩. 2013. 『精神疾患言説の歴史社会学：「心の病」はなぜ流行するのか』新曜社.

（さとう　まさひろ　小樽商科大学）